

海外の話題

コロナウィルス感染拡大を受けたマンハッタンの様子

農林中央金庫 ニューヨーク支店長 和田 透

遠いアジアでの出来事とやや楽観した見方が2月ぐらいいまで多かった新型コロナウイルスであるが、ここニューヨークでも感染者の増加を受け急速に危機感が高まっている。3月18日現在でニューヨーク州での感染者は2,382人、ニューヨーク市のみの感染者数は1,871人であるが、日を追うごとに感染者の増加数自体が大幅に増えている状態である。州や市からは毎日のように新たな対策が出されている。3月16日からニューヨーク市内の約1,800の公立学校は（4月20日まで）休校となり、17日午前9時から市内のすべてのバーやナイトクラブ、映画館、劇場、コンサートホールは営業が停止となった。またレストランやカフェなどの飲食店については店内飲食が禁じられ、テイクアウトや出張デリバリーのみが許可されている。企業のオペレーションについても在宅勤務が推奨され、エッセンシャルな産業（食品関連や小売、病院、金融機関などの生活に不可欠な産業）を除いては、オフィスで働く人数を半分にすることが求められている。州と市が競うように（実際に競っている気がする）新たな対策を出してくるため、人々の間でも大きな混乱が生じている。中でも休業を余儀なくされているレストランなどは死活問題となっている。

観光客がいなくなり、人々の外出も控えられているためマンハッタンの街中からも人波が消え、1ヶ月前とは比べ物にならないほど静まり返っている。いつもなら観光客で身動きがとれなくなるほど混み合っているタイムズ・スクウェアでさえ人はまばらである（電光掲示板などは相変わらず煌々としているが）。また列車やバスなどの交通機関も同じ車両に乗っているのが数人というぐらいの空き具合である。筆者は徒歩通勤であるが、人混みの少なさに初めは快適さも感じていたものの、ストリートによってはほとんど人が歩いていない所もあり、ここまでくると治安面での不安を感じるほどである。筆者は20年以上前にもニューヨークで勤務した経験があるが、久しぶりに当時の街中を歩く時の「緊張感」に近いものを感じている。当時はマンハッタン内であっても人通りの少ない場所などを歩く時には、前や後ろから不審な人が近づいてこないかとか、荷物の持ち方などに常に緊張感を持っていた記憶がある。そう感じ始めるとついこの間までは気にもとめなかった通行人が皆不審者に見えてくるから不思議である。ほんの1ヶ月ほどでここまで雰囲気が変わってしまったことは大きな驚きである。

米国ではこの冬、インフルエンザも大流行となり死者も1万数千人に上っている。インフルエンザについては大した騒ぎにはならなかったが、コロナウィルスについてはなぜこれほどの大騒ぎになっているのだろうか。足元の街の様子や金融市場の大混乱を見ているとふと疑問に思う時がある。やはり得体の知れないウィルスであることやワクチンのないことが人々の恐怖心をあおっているのであろうか。一日も早くこのコロナ騒動が終結に向かい、街中や金融市場が活況を取り戻せることを願ってやまない。